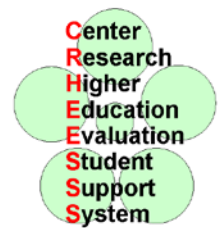


週刊センターニュース

No.237



第237号(2008年12月8日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

○●○ 第208回共同学習会のご案内 ○●○

通常の曜日と異なりますので、ご注意ください。

日時: 12月15日(月) 16時30分~18時00分

会場: 角間キャンパス総合教育1号館2階大会議室

発表者: 西山宣昭・渡辺達雄・鎌田康裕(大学教育開発・支援センター)

テーマ: 「秋季(9月)入学の現状・国内大学の事例研究」

趣旨: 本学は、平成20年度政策課題対応経費の支援を受けて「9月入学の調査研究及び入試・教育体制の整備」に関する調査研究を現在進めている。今回は、その一部として実施された国内の事例調査の概要を報告する。

○●○ サイエンスアゴラ2008 出張報告 ○●○

11月22-24日、国際研究交流大学村(日本科学未来館、東京国際交流館、産業技術総合研究所臨海副都心センター)にてサイエンスアゴラ2008が開催された。筆者はサイエンス・コミュニケーションに関する情報収集のため参加してきた。サイエンスアゴラとは、「科学を楽しみながら科学と社会について語り合うための広場(アゴラ)です」(サイエンスアゴラ2008パンフレットより)とあるように、子供から大人まで楽しめるブース展示、実験工作教室、ワークショップ、討論会、シンポジウム、トークショーなどが用意された我が国最大級の科学イベントである。

【<http://scienceportal.jp/scienceagora/agora2008/>】

サイエンス・コミュニケーションとは「科学技術に対する市民と専門家の知識的乖離を結びつけるやりとり」のことであり、この役割を担う者はサイエンス・コミュニケーターと呼ばれる(現在は資格・職種ではなく役割)。当然、その活動内容は幅広く、例えば研究者と市民との対話の場所の創造(サイエンスショー、サイエンスカフェ)、資料の展示(科学博物館、サイエンスギャラリー)、情報伝達(ラジオ・ビデオ・ウェブの作成、出前授業、広報誌発行)などがあげられる。

上記のような活動は、サイエンス・コミュニケーションと意識しなくとも昔から存在してきた。しかし、サイエンス・コミュニケーターの養成というように明瞭で具体的な動きがはじまったのは、意外にも2004-6年あたりからと歴史が浅い。その背景には科学技術分野での問題(BSE問題など)に由来する不信感が無関心に発展するといった悪循環が起こっており、科学への信頼回復や理科離れに抑制をかける動きが必要とされた。言い換えれば、対応策のひとつとして専門家の知識を一般市民に翻訳できる人間、一般市民の疑問や意見を専門家に伝える人間、そして「科学は本来とても面白いもの」と伝えられる人間の養成が強く求められたのである。

サイエンスアゴラの出展者たちは、大学の教員や大学院生だったり、研究所の研究者や広報担当者、企業の開発担当者やNPO法人の職員だったりと実に多様である。彼らは各自の展示や取り組みについて、とても理解しやすく丁寧なポスターや配布物、個別説明によって紹介してくれた。会場の雰囲気

気は学祭での理系の各研究室が行う展示のようなものだが、訓練を積んだ者が行う紹介はやはりレベルが高い。

催しは同時並行して行われるために見学できたものはかなり限られるが、執筆者が特に興味をもった催しを以下に2つ紹介する。

①「サイエンス・プレゼンテーション」(23日午前)

大学院生や学校教員などの5名のプレゼンターが、地学研究や植物の不思議、もったいない話などのテーマについて7分間のプレゼンテーションを行い、審査員および観客によって最も印象深かった人を投票で決めるコンテストである。対象が一般人であるため、導入のテクニック、話法、間の取り方などの趣向に富んでおり、プレゼンテーション技法としてとても参考となる内容だった。

②「大人のための秘密のパンフ『おとなび』の紹介」(22~24日終日)



図1. おとなびの表面

「おとなび」とは国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座「SC1」を修了した大学院生2名が作成した大人向けのパンフレットである(図1)。表には国立科学博物館2階たんけん広場の18種類の展示の解説が載っている。(ちなみに裏はタンポポの話)「子供が科学に興味を持つきっかけを、親から与えて欲しい」との彼女たちの想いが込められ、大人が子供と一緒に国立科学博物館に訪れた際に子供の「ふしぎ!おもしろい!」を引き出して会話を楽しめるように配慮されている。制作者はこのおとなびについて、「ガイドパンフレットというより、子供との会話を引き出すための大人のカンニングペーパー」と考えているところが面白い。

展示解説のひとつを見てみよう。光の三原色の紹介では(図2)、「3つの色の光をあわせたら何色になるかな?」という子供に見るポイントを指し示す一言と(左下ふきだし)、「テレビの画面にも三原色が隠れているよ」という「あそび」を「まなび」に変えるもう一言に(右上ふきだし)、簡単な原理が記してある(右文章)。

おとなびの評価について行ったアンケート調査によると、回答者(94%が親)の60%が子供との会話に発展したことを実感しているという結果であった。おとなびは科学に親しみを持ってもらうだけでなく、子供と一緒に科学を語り合う機会を提供しているといえる。

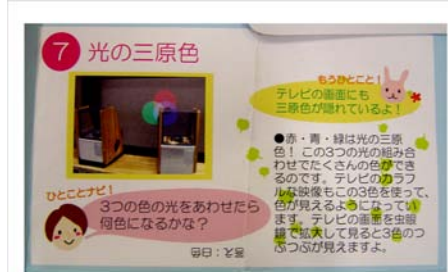


図2. おとなびの表面の拡大図

以上の紹介はサイエンスアゴラ 2008 で拝見したほんの一部でしかないが、筆者は「サイエンス・コミュニケーション」の理念を理系学生に意識して身につけてもらいたいと強く感じている。学生が大学という高等教育機関で専門的訓練を受けているにも関わらず、身につけた知識を表現できる機会が少ないのではないかと危惧している。著者の経験では、大学の授業として卒業までに身につける表現技法は、総じて同類のコミュニティメンバーに向けた学会発表的なものに限られていた。同じ専攻・コースでも隣の研究室の内容は理解できないという発表も多かった。プレゼンテーションの指導を行う教員として、多様な発表の機会の重要性を強く認識している。サイエンス・コミュニケーションを取り入れた学習は、学生の科学に対する積極性を高めるだけでなく、専門家の卵としての大学院生指導にも大きな示唆を与えてくれるだろう。(文責: 大学教育開発・支援センター 末本 哲雄)